2024年7月20日（土）
大東文化大学大学院中国言語文化専攻・外国語学部中国語学科共催
第27回国際シンポジウム

中日両言語における因果関係を表す複文の分類体系への再構築

―カテゴリーの類縁性の視点から―

祁　吉曼

目　次

1　はじめに
2　中日両言語における因果複文の分類の概説
3　因果範疇複文への再定義
4　両言語における因果関係を表す複文への再分類
　4.1　統一的な基準の設定
　　4.1.1 時間性：＜未然＞＜已然＞
　　4.1.2 時間順序：＜認知の順序＞＜現実の順序＞
　　4.1.3 確定性：＜事実性＞＜現実性＞
　　4.1.4 主体の判断性：＜主観＞＜客観＞
　4.2　類縁性から見る分類の仕方
　　4.2.1 説明性因果複文
　　4.2.2 推論仮定性因果複文
　　4.2.3 意志性因果複文
5　おわりに
参考文献

1　はじめに

「因果複文」とは因果関係を表す複文で、客観的な因果関係の言語での主観的な表現形式なので、主観性と客観性との合わさる特徴があるものである。

「原因」を表す節は「原因文」で、「結果」を表す節は「結果文」である。

語順上、前にある節は「先行文」で、後にある節は「後続文」である。

1　はじめに

「因果複文」には広義と狭義との違いがあり、

「広義の因果複文」は「広義の因果関係」を表す複文であるが、「狭義の因果複文」は「狭義の因果関係」を表す複文であり、一般に複文の二級またはそれ以上の階層の分類から分けられる「因果複文」であり、典型的な原因・理由を表現する複文を指す。

1　はじめに

中国語は日本語に比べて形態変化に乏しく、構文構造も緩やかであるため、中国語において、「広義の因果複文」に関する研究は少なくないが、

例えば、黄成稔（1990）の複文分類体系では、「広義の因果複文」には因果複文、仮定複文、条件複文、目的複文や連鎖複文などが含まれている。邢福義（2003）では、「広義の因果複文」には因果文や推断文や仮定文や条件文や目的文などが含まれている。

日本語においては、意味より形式が重要であり、さらに構文構造も緊密であるため、「因果関係」は一般に「狭義の因果関係」を指している。

1　はじめに

筆者はこれまで、中日両言語における複文の分類と「因果範疇複文」の位置付けを整理した上で、すでに両言語における複文の分類体系において、広義の「因果範疇」が存在していることを明らかにした。

図１が示す通り、中国語でも日本語でも、狭義の因果関係、仮定条件関係、目的関係、推断関係及び継起関係を表す複文は「広義の因果関係」を大前提にしていると分かった。

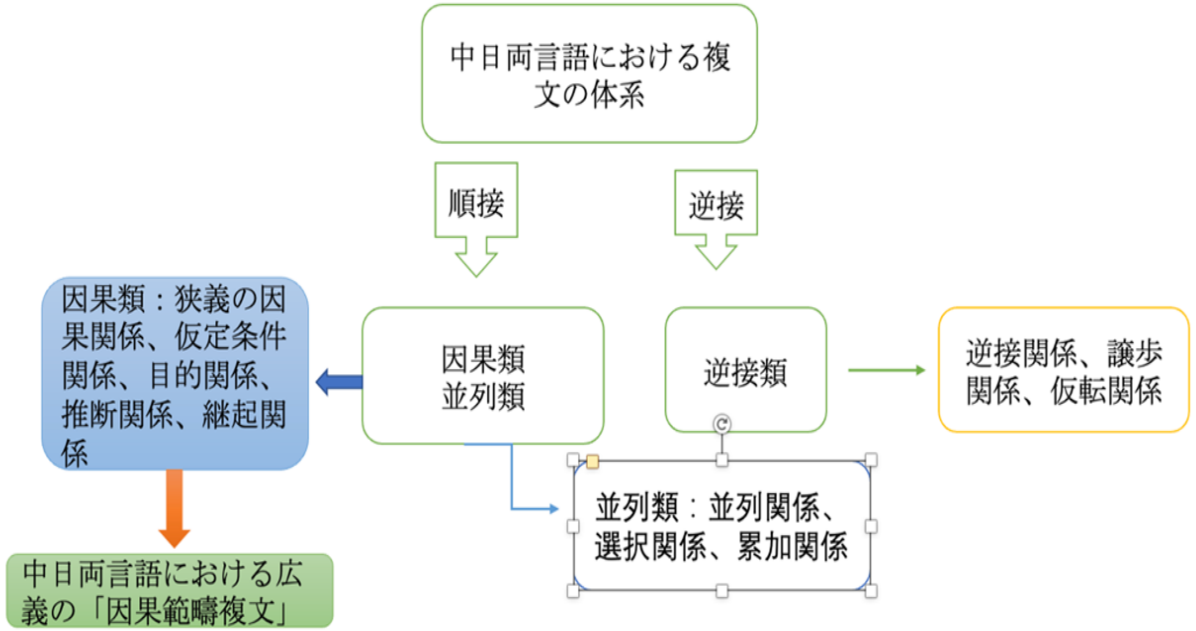

図１　本研究での中日両言語における「因果範疇複文」の範囲（筆者）

本研究は、「広義の因果複文」を「因果範疇複文」と呼ぶ。

1　はじめに

本研究は、中日両言語における「因果複文」を「広義の因果複文」（因果範疇複文）に統一し、意義素の角度から「広義の因果複文」を再定義することで、統一的な基準によれば、どのように複文を再分類するか、またカテゴリーの類縁性の視点から、中日両言語における因果関係を表す複文の分類体系をどのように再構築するか、ということについて考察するものである。

2　中日両言語における因果複文の分類の概説

　中日両言語における「因果複文」の位置付けが異なっており、中国語においては、「広義の因果複文」と「狭義の因果複文」との両者が存在しているが、日本語においては、「狭義の因果複文」は普通である。

　以下では、両言語において、「狭義の因果複文」の分類について概観した上で、その分類基準は同じか否か、ということを見ていく。

2　中日両言語における因果複文の分類の概説

　中国語の複文の分類体系において、「狭義の因果複文」は一般に「主従複文」（黎錦熙、劉世儒1962；王力1985；高名凱1986；黎錦熙2007）あるいは「偏正複文」（丁声樹、呂叔湘他1999；黄伯栄、廖序東2007；張斌2008；胡裕樹2018）の下位分類にある。

　また、論理的意味関係によって、「主従複文」あるいは「偏正複文」を「狭義の因果複文」や「条件複文」などに分類する。

2　中日両言語における因果複文の分類の概説

構造の形式から見れば、「原因文」と「結果文」との前後順序によって、「因果複文」は「原因から結果への類推」と「結果から原因への遡り」に分けられている。

趙遵礼（1985）、劉振鐸（1986）、黄成穏（1990）、胡裕樹（1995）、張斌（2008）などでは、「因果複文」は「説明の因果複文」と「推論の因果複文」に分けられている。

2　中日両言語における因果複文の分類の概説

呂叔湘（1982）では、「因果関係」は「原因の解釈」と「結果の表明」に分けられ、また、前者は「事実の原因」と「行為の理由」及び「推論の理由」に分けられている。

王緗（1985）では、「因果複文」は「説明因果」と「推論因果」及び「差し出す結果」に分類される。

王維賢（1994）では、「因果複文」は「一般的な因果複文」と「非一般的な因果複文」（複雑な因果複文）に分けられ、後者はまた「推断」と「逆接」に分けられる。

范暁（1998）は「因果複文」を「一般的な因果文」と「推論因果文」及び「目的因果文」に分ける。邵敬敏（2007）は「原因—結果」関係を「説明因果複文」と「推断因果複文」及び「如何せん因果複文」に分類した。

2　中日両言語における因果複文の分類の概説

以上の分類をまとめ、「狭義の因果複文」は一般的に二種類に分けられ、三種類に分けられる場合もあるが、主として「説明の因果複文」と「推論の因果複文」との二つの種類はよく見られることが分かる。

2　中日両言語における因果複文の分類の概説

日本語の複文の分類体系においては、複文を従属節と並列節、あるいは、連体節と連用節に分類することをもとに、節の統語上の位置付けによると、さらに下位分類を行うこともあれば（益岡隆志、田窪行則1992；前田直子2009）、文成分の視点から複文を規定語従属節、主語従属節、述語従属節や状況語従属節などに分ける場合もある（鈴木重幸1972；高橋太郎2005）。

または、複文を並列関係複文と主従関係復文（寺村秀夫1981）、あるいは名詞節、連体（修飾）節、連用（修飾）節及び並列節に分ける（益岡隆志1997）。

2　中日両言語における因果複文の分類の概説

以上の分類体系から見ることで、「狭義の因果複文」は一般的に従属節の副詞節あるいは連用節の副詞節の下位分類に存在する場合もあれば、

また、状況語従属節と限定的な述語を修飾する節と連用修飾節の下位分類に存在する場合もあることが得られた。

2　中日両言語における因果複文の分類の概説

中国語の複文は論理構造から分類しているが、一方、日本語の複文は統語構造から分類している。両者の分類の基準は異なっているので、それを統一する必要があると思われる。

また、以上は基本的に「狭義の因果複文」について分類した結果である。「狭義の因果複文」に対する分類の基準が異なっていると、「広義の因果複文」に対する分類の結果も影響を受けているのではないかと考えられる。

それゆえ、上述の中日両言語における「因果範疇複文」（広義の因果複文）の範囲をもとに、「因果範疇複文」に対して再定義した上で、統一的な基準に基づいて、両言語の「因果範疇複文」の再分類について考察し、さらにカテゴリーの類縁性の視点から分類の仕方を試みることは必要だと思われる。

3　因果範疇複文への再定義

中国語の複文の分類体系において、「広義の因果複文」（因果範疇複文）が存在するのは広く認められている。

呂叔湘（1956）は「広義の因果関係」を仮定文、推論文と因果文に分けている。仮定文は、もし甲であれば、乙であり、また、甲と乙が虚構であり、理論的または一般的なことを表し、一般的な因果関係を表すもので、例えば、“要是…就…”である。推論文は、甲なら、乙であり、甲は事実だが、乙が虚構であり、推断因果を表すもので、例えば、“既然…就…”である。因果文は、甲なので、乙であり、また、甲と乙が事実であり、説明因果を表すもので、例えば、“因为…所以…”である。

張志公（1982）は因果関係複文を現実的因果関係、仮定的因果関係と条件的因果関係に分けている。

3　因果範疇複文への再定義

黄成穏（1990）はそれを「狭義の因果複文」と仮定複文、条件複文、目的複文、連瑣複文とに分類する。

董為光（1999）では、「広義の因果複文」は因果関係複文、条件関係複文、仮定関係複文、目的関係複文の組み合わせと見做す。

邢福義（2003）では、因果文、推断文、仮定文、条件文、目的文は様々な「因果集合」を反映することが指摘されており、 二つの出来事については、原因と結果との順接関係さえあれば、広義の因果関係に属し、それによって成り立っている複文は因果類の複文に属することが主張されている。

3　因果範疇複文への再定義

一方で、日本語の複文の分類体系において、「広義の因果複文」についてはほとんど言及されることがなかった。これまで、筆者は中国語の複文における「広義の因果複文」を位置付けたことをもとに、日本語の複文での中国語に対応する「狭義の因果複文」と仮定条件複文、目的複文、推断複文及び継起複文はすべて「広義の因果関係」を成立の前提とすることを明らかにした。

それゆえ、本研究は、中日両言語の複文の分類体系において、「因果範疇複文」が存在するのは共通であることを主張する。

3　因果範疇複文への再定義

確かに、中日両言語において、因果関係を表す複文（因果範疇複文）は順接関係を表示している。前述の図１の通り、並列類の複文でも、因果類の複文でも順接関係を表すことが分かる。

それでは、因果範疇複文を定義するために、順接関係しか由らないのは十分ではないと思われる。そのため、以下に、意義素と時間順序（時系列）の角度から「因果範疇複文」について再定義を試みる。

3　因果範疇複文への再定義

意義素とは単語の意味を構成する単位である。単語の意味という外形のないものを分析するには、それなりの概念という道具立てが必要なので、意義素によると、異なる単語の意味を区分できたり、ある程度、その概念を定義することができる。

服部四郎（1968）は、個々人による具体的な「発話」の意味的側面を「意味」と呼び、発話から抽象される「文」レベルの意味的側面を「意義」、文から抽象される「単語」レベルの意味的側面を「意義素」と呼ぶ。
池上嘉彦（1975）では、意義素とは単一の語彙素として実現されうる意味単位であり、意義素には一つの要素からなる構成の単純なものと二つ以上の要素からなる複合的な構成のものとがあることが指摘されている。
菅原光穂（2012）で主張している意義素は直感的でかつ帰属的な統一を持つ概念内容のことである。
小宮秀人（2021）では、意義素は発話において繰り返し認められる、社会習慣的特徴から成り立つことが主張されている。

つまり、意義素は「単語」レベルの意味的側面を指し、社会習慣的特徴があり、抽象的な単位である。

3　因果範疇複文への再定義

時間順序とは、戴浩一（1988）によって、二つのシンタックス単位の相対的な語順に基づいて、それが表示する概念上の状態の時間順序である。具体的には図2の通りである。

中国語において、単文でも、複文でも、時間の順序は一般に適用できるが、日本語では、複文に応用される。

語順

時間順序＝物理空間＝行動の順序（現実の順序）＝事態発生の順序

反時間順序＝心理空間＝思考の順序（認知の順序）＝事態把握の順序

図 2 語序と時間順序との関係

3　因果範疇複文への再定義

因果範疇複文は必ず複文である。また、前述の通り、それは順接関係を表す複文である。例えば、

（1）明日はいい天気であれば、一緒に散歩しましょうか。（如果明天天气好，就一起去散步吧。）

（2）今日は雨が降っていて、それで、試合を中止しましょう。（今天在下雨，因此取消比赛吧。）

（3）途中で、事故が発生したために、彼は遅れた。（半路上发生事故了，因此他迟到了。）

（4）来週の講義があるために、今、私は先に予習した。（为了下周上课，我现在提前预习了。）

（5）今日は雨が降っていて、それで、家で寝ていた方がいい。（今天下雨了，那么最好在家睡觉。）

（6）今日は雨が降っていて、気温がさがり、それで、学校へ行って勉強しましょう。（今天下雨了，气温下降了，因此去学校学习吧。）

3　因果範疇複文への再定義

（7）之所以他没来上课，是因为家里有事。（彼が授業に欠席したのは、家で用事があったからである。）

（8）東京へ行くなら、傘を持ったほうがいいと思われる。（既然你要去东京，那我建议带着伞。）

（9）彼女は歌が歌えて、それに、踊ることもできる。（她会唱歌，而且也会跳舞。）

以上の例文はすべて、順接関係を表示するものであるが、（1）～（8）は因果範疇複文に属し、その語順が現実の順序と認知の順序との両方に合致しているので、時間の順序によって分析できるが、（9）は並列類の複文に属し、その語順が事態発生または把握の前後順序と関係がないので、時間の順序に適用できない。

3　因果範疇複文への再定義

（1）～（8）は、事態発生の順序でも事態把握の順序でも、同じ方向にある。

例（1）は、因果範疇複文での仮定条件複文で、心理空間での思考の順序（「明日はいい天気であること」・“明天天气好”→「一緒に散歩すること」“一起去散步”）に合致する。明日の事態を把握する場合は、まだ実現されておらず、未発生の出来事に関する因果関係である。

例（2）は、因果範疇複文での「狭義の因果複文」で、物理空間での行動の順序（「今日は雨が降っていること」・“今天在下雨”→「試合を中止すること」“取消比赛”）に合致する。今日の発生した事態はもう事実になったので、既定の出来事に関する因果関係に属する。

例（3）は因果範疇複文での「狭義の因果複文」で、物理空間での現実の順序（「途中で、事故が発生したこと」・“半路上发生事故了”→「彼は遅れたこと」“他迟到了”）に合致する。もう発生した事故なので、遅れたという結果を引き出した。そのため、既定の事実に関する因果関係に属する。

3　因果範疇複文への再定義

例（4）は因果範疇複文での目的複文で、常識上の「予習—講義」という事態生起の順序はその語順に合致しないが、心理空間での認知の順序（「来週の講義があること」・“下周上课”→「私は先に予習したこと」“我提前预习了”）に合致する。即ち、話し手はまず講義のことを考えてから、予習したということである。前件はまだ発生しないが、後件は既に発生しているので、この場合には＜–現実性＞・＜–事実性＞の意味がある。

例（5）は一般に因果範疇複文での典型的な継起複文と見做し、非典型的な「狭義の因果複文」と見做してもよいと考えられる。それは物理空間での行動の順序（「今日は雨が降っていること」・“今天下雨了”→「家で寝ていたこと」“在家睡觉”）に合致する。

例（6）も因果範疇複文での典型的な「狭義の因果複文」で、物理空間での行動の順序（「今日は雨が降っていて、気温がさがること」・“今天下雨，气温下降了”→「学校へ行って勉強すること」“去学校学习”）に合致する。

3　因果範疇複文への再定義

しかしながら、例（5）と（6）との前件はいずれにしても「今日は雨が降っていること」（“今天下雨了”）という原因と関係があるが、その後件の結果は違っている。というのは、人間の異なる心理と認知に関わっている。そのため、例（5）と（6）はある程度、物理空間での現実の順序にも心理空間での認知の順序にも合致する。

例（7）は因果逆転の場合に属するが、非典型的な因果複文として、認知の順序（“他没来上课”・「彼が授業に欠席したこと」→“家里有事”・「家で用事があったこと」）に合致する。

例（8）は因果範疇複文での推断複文で、心理空間での思考の順序（「東京へ行くこと」・“你要去东京”→「傘を持ったほうがいい」“带着伞”）に合致する。なぜなら、事態発生の順序によれば、実際は「「傘を持ったほうがいい」“带着伞”→「東京へ行くこと」・“你要去东京”」という順序である、が、話し手の認知の順序から分析すると、「「東京へ行くこと」・“你要去东京”」という確定する事実を根拠にして、「「傘を持ったほうがいい」“带着伞”」という話し手の要求や判断などを表すからである。

3　因果範疇複文への再定義

例（9）は並列複文なので、その前件と後件は事態発生の順序とも、事態把握の順序とも関係がない。

以上の分析によれば、意義素と時間順序に基づいて、「因果範疇複文」について再定義してみると以下のようになる。

＜因果範疇複文＞＝＜複文＞＋＜順接関係＞＋＜事態生起の順序が認知の順序にも現実の順序にも合致すること＞＋＜時系列（行動の順序と思考の順序）において同じ方向にあること＞＋＜「原因」、「目的」、「仮定」、「条件」、「継起」、「推断」に共通する意義素（「理由」）として存在すること＞

4　両言語における因果関係を表す複文への再分類

上述のように、両言語における「狭義の因果複文」の分類基準は異なっているが、その現状をもとに、日中対照の視点から「広義の因果複文」（因果範疇複文）に関する研究を平行にして進めるために、その範疇内にある複文の種類を確定するだけでなく、「因果範疇複文」を再定義した上で、統一的な基準によって「因果範疇複文」を再分類する必要がある。

4　両言語における因果関係を表す複文への再分類

4.1　統一的な基準の設定

因果範疇複文を再定義する場合は、意義素の＜事実性＞、＜現実性＞、＜既定＞、＜未発生＞、＜事態発生の順序＞、＜事態把握の順序＞などに言及した。よって、以下、主にこれらの意義素をもとに、本来の意味から拡張していくことを通じて、分類の統一的な基準を考えてみることにする。

4.1.1 時間性：＜未然＞＜已然＞

＜未然＞とはまだ発生しない出来事を指し、すなわち、将来実現する可能性があることを表示する。例えば、

（10）明日は雨が降れば、学校へ行く時に傘を持ってください。（如果明天下雨，请上学时带伞。）

＜已然＞とは、今まですでに発生した出来事を指す。例えば、

（11）彼は病気になったために、今、家で休んでいる。（他生病了，因此，现在正在家里休息。）

4　両言語における因果関係を表す複文への再分類

4.1　統一的な基準の設定

4.1.2 時間順序：＜認知の順序＞＜現実の順序＞

上述の通り、時間順序は「物理空間」と「心理空間」によって、「現実の順序」（「行動の順序」「事態発生の順序」）と「認知の順序」（「思考の順序」「事態把握の順序」）に分けられる。

意義素として、**＜認知の順序＞はまだ発生しない二つの出来事の状態の時間順序あるいは前後件の一つの出来事が発生した場合と、語順が＜現実の順序＞に反する時間順序を指す。**例えば、

（12）明日の試験に合格するために、今晚は夜遅くまで復習している。（为了明天考试通过，今晚正在熬夜复习。）

＜現実の順序＞はすでに発生した二つの出来事の状態の時間順序と、語順が常識上の時間順序に一致する場合を指す。例えば、

（13）途中で渋滞していて、それで、会議の開始を遅らせてしまった。（现在路上正在堵车，因此推迟了开会。）

4　両言語における因果関係を表す複文への再分類

4.1　統一的な基準の設定

4.1.3確定性：＜事実性＞＜現実性＞

もう確定した出来事に対して、＜事実性＞と＜現実性＞との意味がある。

その中で、＜事実性＞とは一回性の意味があり、確定する出来事を指す。

例えば、

（14）王さんが試合に出るのなら、彼がピッチャーだろうね。（既然小王要参加比赛，他是投手吧。）

＜現実性＞とはもう実現された出来事を指すが、＜事実性＞と違って、恒常性の意味がある。例えば、

（15）彼女はずっと一生懸命に勉強していて、それで、いつも期末試験に合格しているね。（她一直都在拼命学习，因此，期末考试总是能及格。）

4　両言語における因果関係を表す複文への再分類

4.1　統一的な基準の設定

4.1.4主体の判断性：＜主観＞＜客観＞

因果範疇複文は、その前件は必ず＜客観＞の意味があるが、後件の方は異なる場合に基づいて＜客観＞または＜主観＞の意味がある。即ち、その後件に対しては、主体の判断性の有無によって、＜客観＞より＜主観＞の意味が強い場合もあれば、＜主観＞より＜客観＞の意味が強い場合もある。発生したり、存在したりする出来事は＜客観＞の意味が強いが、まだ発生しなく、主体による仮想する出来事は＜主観＞の意味が強い。それぞれ例を挙げてみよう。

4　両言語における因果関係を表す複文への再分類

4.1　統一的な基準の設定

（16）彼はお腹が痛いと感じたために、病院に行った。（他感觉肚子疼，因此去了医院。）

（17）明日は雨が降るかどうか、分からなくて、それで、明日の計画が変わるのかもしれない。（不知道明天下不下雨，那么，明天的计划也许会变。）

　例（16）は、その前件と後件はすべて事実なので、＜客観＞の意味が強いと思われるが、例（17）は、前件の「明日の天気状況が分からないこと」が事実であるが、後件の「明日の計画の変わる可能性があること」は主体の判断に基づくことなので、＜主観＞の意味が強いではないかと考えられる。

4　両言語における因果関係を表す複文への再分類

4.2　類縁性から見る分類の仕方

中日両言語における因果範疇複文にある「狭義の因果複文」、仮定条件複文、目的複文、推断複文及び継起複文はともに、「広義の因果関係」を成立の前提にしていることがすでに明らかにされている。だからこそ、因果範疇複文にある各種の複文はカテゴリーの類縁性を備えている。本研究は、**この範疇内にある複文の範囲を確定した上で、それらに共通する意義素をもって、カテゴリーの類縁性の角度から因果範疇複文への再分類を試みていく**。

4　両言語における因果関係を表す複文への再分類

4.2　類縁性から見る分類の仕方

上述のように、因果範疇複文は順接関係を表示する複文である。また、並列複文と違って、時間順序に適用できるので、出来事の間の論理性、関係性を備えている。そのため、他の範疇の複文と区分すれば、まず、因果範疇複文には＜＋複文＞＜＋順接関係＞＜＋時間順序＞＜＋論理性＞（前件：＜＋原因＞＜＋理由＞；後件：＜＋結果＞）との意味があるとは認められる。以下では、カテゴリーの類縁性の角度から、意義素を手がかりにして、因果範疇複文の分類体系を再構築していく。

4　両言語における因果関係を表す複文への再分類

4.2　類縁性から見る分類の仕方

4.2.1 説明性因果複文

「説明性因果複文」は必ず＜已然＞と＜事実性＞と＜現実性＞と＜客観＞と＜事態発生の順序＞の意味があると思われる。例えば、

（18）昨日は雨が降っていたために、運動会は中止されてしまった。（昨天下雨了，因此运动会取消了。）

（19）今日は授業があると分かり、それで、私は早起きして学校へ行った。（知道今天有课，因此我早起去了学校。）

（20）今朝、外は豪雨が降っていて、それで、家でちょっと待っている。（今早，外面正下着暴雨，那么，稍微在家等等。）

4　両言語における因果関係を表す複文への再分類

4.2　類縁性から見る分類の仕方

4.2.1 説明性因果複文

以上の例文をまとめてみると、いずれの例も＜已然＞、＜客観＞、＜事態発生の順序＞の意味が強いことが分かる。しかしながら、＜事実性＞の意味は以上の例文で、＜現実性＞より強いと思われる。なぜなら、説明性因果複文には強い＜已然＞の意味があるので、過去と現在との時に発生した出来事を一般に指しているが、＜現実性＞には恒常性の意味があるので、過去と現在及び未来の出来事を普通に指している。そうすると、＜＋已然＞（＜−未然＞）＜＋客観＞（＜−主観＞）＜＋現実の順序＞（＜−認知の順序＞）＜＋事実性＞＜−現実性＞＝＜説明性因果複文＞。この場合は大体「狭義の因果複文」と「継起複文」に相当すると考えられる。

4　両言語における因果関係を表す複文への再分類

4.2　類縁性から見る分類の仕方

4.2.2 推論仮定性因果複文

「推論仮定性因果複文」は一般にまだ発生しない出来事を指すが、前件と後件との間に一つの出来事が発生したり、確定したりする場合をも指す。例えば、

（10）明日は雨が降れば、学校へ行く時に傘を持ってください。（如果明天下雨，请上学时带伞。）

（14）王さんが試合に出るのなら、彼がピッチャーだろうね。（既然小王要参加比赛，他是投手吧。）

例（10）は、その前件と後件との両者がすべてまだ発生しなく、後件が主体の「命令のモダリティ」を表すが、例（14）は、その前件が確定する事実であるが、後件の方は必ず真実的かどうか、まだ確定できないので、前件を根拠にして、主体の判断性（あるいは推測のモダリティ）を表す。しかし、二つの例文はすべて＜認知の順序＞（＜思考の順序＞）に合致する。

4　両言語における因果関係を表す複文への再分類

4.2　類縁性から見る分類の仕方

4.2.2 推論仮定性因果複文

そうすると、例（10）は＜＋未然＞の意味があり、また、＜主観＞の意味も強いが、例（14）は、その前件が確定する事実であるため、例（10）より＜未然＞の意味が弱く、また、後件の「推測のモダリティ」によって、その＜主観＞の意味も強い。

要するに、＜±未然＞＜＋主観＞（＜＋客観＞）＜＋認知の順序＞＜−事実性＞＜−現実性＞＝＜推論仮定性因果複文＞。この場合は大体「仮定条件複文」と「推断複文」に相当すると思われる。

4　両言語における因果関係を表す複文への再分類

4.2　類縁性から見る分類の仕方

4.2.3 意志性因果複文

「意志性因果複文」は一般に複文の前後件の一つがまだ発生しない場合を指す。

例えば、

（12）明日の試験に合格するために、今晚は夜遅くまで復習している。（为了明天考试通过，今晚正在熬夜复习。）

例（12）では、その前件はまだ発生しないが、後件は発生している。また、前件は主体の意志性を表し、後件は主体の行動を表す。それゆえ、それは＜認知の順序＞（「明日の試験に合格すること」“明天考试通过”→「今晚は夜遅くまで復習していること」“今晚正在熬夜复习”）に合致する。前件は主体の意志性を表すので、＜主観＞の意味が強く、後件は主体の行動を表すので、＜客観＞の意味があると考えられる。そうすると、＜－已然＞（＜＋未然＞）＜＋認知の順序＞＜＋主観＞（＜＋客観＞）＜－事実性＞＜－現実性＞＝＜意志性因果複文＞。この場合は大体目的複文に相当すると考えられる。

5　おわりに

　中日両言語において、異なる言語特徴があるので、複文の分類体系における「因果複文」に対する把握は違っている。中国語では、「広義の因果複文」と「狭義の因果複文」との両者はよく研究されたことがあるが、日本語では、後者の方は一般です。それゆえ、本研究では、中国語での「広義の因果複文」（「因果範疇複文」）の範囲を手がかりにして、日本語でそれぞれ対応する各種の複文は「広義の因果関係」を成立の前提にすることを明らかにした上で、統一的な基準に基づいて、両言語における共通な因果範疇複文への再定義と再分類を試みた。

5　おわりに

まず、両言語における因果範疇複文の範囲を確定した上で、意義素と時間順序との角度から因果範疇複文を再定義した。それから、意義素による解釈をもとに、「時間性：＜未然＞＜已然＞」、「時間順序：＜認知の順序＞＜現実の順序＞」、「確定性：＜事実性＞＜現実性＞」及び「主体の判断性：＜主観＞＜客観＞」という四つの統一的な基準を設定した。最後は、因果範疇複文にある各種の複文が備えるカテゴリーの類縁性の視点から、因果範疇複文の分類体系への再構築を試みた。

5　おわりに

研究の結果として、因果範疇複文を主として「説明性因果複文」（＝＜＋已然＞（＜−未然＞）＜＋客観＞（＜−主観＞）＜＋現実の順序＞（＜−認知の順序＞）＜＋事実性＞＜−現実性＞）、「推論仮定性因果複文」（＝＜±未然＞＜＋主観＞（＜＋客観＞）＜＋認知の順序＞＜−事実性＞＜−現実性＞）及び「意志性因果複文」（＝＜−已然＞（＜＋未然＞）＜＋認知の順序＞＜＋主観＞（＜＋客観＞）＜−事実性＞＜−現実性＞）という三つの種類に分けた。

本論の研究結果は、今後、両言語における因果範疇複文の連続性に関する対照研究を進める際にして、重要な基礎だと思われる。

参考文献(日本語)

[1]大島吉郎2021「中国語における「状態」についての試論―「状態」をどう規定するか―」、大東文化大学大学院『中国言語文化学研究』第10号（p. 12）

[2] 益岡隆志・田窪行則1992『基礎日本語文法・改訂版』、くろしお出版

[3]前田直子2009 『日本語の複文-条件文と原因・理由文の記述的研究-』、くろしお出版

[4] 鈴木重幸1972 『日本語文法・形態論』、むぎ書房

[5] 高橋太郎2005 『日本語の文法』、ひつじ書房

[6] 寺村秀夫1981 『日本語教育指導参考書 日本語の文法（下） 条件の表現』、国立国語研究所

参考文献(日本語)

[7] 益岡隆志1997 『新日本語文法選書２ 複文』、くろしお出版

[8] 服部四郎1968 『英語基礎語彙の研究』、三省堂

[9] 池上嘉彦1975 『意味論』、大修館書店

[10] 菅原光穂2012 「意義素の概念とKatz-Fodorにおける語の意味」、『北海道教育大学紀要（第1部A）』第19巻第1号

[11] 小宮秀人2021 「意義素再考：イェルムスレウの「基本的意味」との比較考察」、異文化コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻『異文化コミュニケーション論集』第19巻

参考文献(中国語)

[1]黄成稳1990 《复句》、人民教育出版社

[2]邢福义2003 《汉语复句研究》、商务印书馆

[3]黎锦熙・刘世儒1962 《汉语语法教材》、商务印书馆

[4] 王力1985 《中国现代语法》、山东教育出版社

[5] 高名凯1986 《汉语语法论》、商务印书馆

[6] 黎锦熙2007 《新著国语文法》、湖南教育出版社

[7] 丁声树・吕叔湘等1999 《现代汉语语法讲话》、商务印书馆

[8] 黄伯荣・廖序东2007 《现代汉语（增订四版）》、高等教育出版社

[9] 张斌2008 《新编现代汉语（第二版）》、复旦大学出版社

[10] 胡裕树2018《现代汉语（重订本）》、上海教育出版社

参考文献(中国語)

[11] 赵遵礼1985 《现代汉语复句辨析》、陕西人民教育出版社

[12] 刘振铎1986 《现代汉语复句》、天津人民出版社

[13] 胡裕树1995 《现代汉语（重订本）》、上海世纪出版集团

[14]吕叔湘1956/1982 《中国文法要略》、商务印书馆

[15] 王缃1985 《复句·句群·篇章》、陕西人民出版社

[16]王维贤等1994 《现代汉语复句新解》、华东师范大学出版社

[17] 范晓1998 《汉语的句子类型》、书海出版社

[18] 邵敬敏2007 建立以语义特征为标志的汉语复句教学新系统刍议、《世界汉语教学》第4期

[19] 张志公1982 《现代汉语》、人民教育出版社

[20] 戴浩一1988 时间顺序和汉语的语序（黄河译）、《国外语言学》第1期（p.10）

ご清聴ありがとうございました